社会的行為としての科目選択

—カリキュラムの形態と生徒の選択行為との関連性の視点から—

小樽商科大学　岡部善平

【キーワード】科目選択、社会的行為、パースペクティブ、総合学科、枠

1　問題の設定

本稿の目的は、高校生の科目選択が一種の社会的行為であるという観点から、生徒の選択行為にいかなる特質があるのか、またこの選択行為がカリキュラムの形態とどのように関連しているのかについて考察することにある。

臨時教育審議会を一つの契機として、中等教育の「個性化・多様化」を目的としたカリキュラム改革が進展を続けている。とくに高等学校では、生徒による「自由な科目選択」を標榜する総合学科や単位制高校の創設、「特色ある学科・コース」の増加や学校設置科目の開設などに見られるように、多様な教育内容を設定し、生徒が自由に選択履修することのできる仕組みを作ることが、カリキュラム改革の一つの方向性となっている。

こうしたカリキュラム改革の方向性を支えているのが、「個性重視の理念」と「自己責任の原則」の考え方である。すなわち、「個性尊重の理念に基づく選択の自由については、（中略）『自らの判断で選択し、行動したことには、自ら責任を負う』という自己選任の原則が伴っている」(1)という認識のもと、生徒は自らの適性、関心、進路展望に応じた教育内容が選択できることが認められ、その一方で自らの選択の結果については常に自らが責任を負うよう促されている。

ところで、筆者はかねてより、こうした選択制にまつわる諸言説には、生徒の選択行為に関する次のような前提があるのではないかと指摘してきた。すなわち、高校生は科目あるいはコースの選択を行う以前から何らかの関心をもっており、その関心に基づいて学校の提示する選択肢のなかから自主的に科目あるいはコースを選択しうるのではないか、という前提である。この前提は、生徒の選択行為を、その生徒個人がもつ関心に基づいた行為、つまり生徒の「個人的行為」とみなす視点に根ざしているということができる。しかし、生徒が必ずしも何らかの具体的な関心をもっているとは限らないし、仮にもっていたとしても、その関心が科目選択やコース選択といった選択行為に直結するほど限定されたものであるとは限らない。学校が選択肢として提示しうる教科・科目やコースが限られたものであり、かつその選択肢の設定においてカリキュラム設置者の教育意図が働いている以上、生徒の科目選択には自らの関心を限定的な選択状況に適合させていく側面があるのではないだろうか。

ウェーバー（Weber, M.）は、「単数或いは複数の行為者の考えている意味が他の人々の行動と関係を持ち、その過程がこれに左右されるような行為」(2)を行為一般のなかでもとくに「社会的行為」として捉えているが、このウェーバーの見解に則ると、生徒の選択行為は自己の関心や進路展望を表出するだけの「個人的行為」ではなく、カリキュラム設置者の教育意図に基づいて提示された限定的な選択肢の規定を受けながら自らの選択の方向性を作り上げていく「社会的行為」とみなすことができるであろう。本研究の意図は、生徒の科目選択をこのような社会的行為とし

て捉え直すことによって、わが国の高校教育おける選択制カリキュラムがいかなる特質と課題を内包しているのか明らかにすることにある。

これまでも、「多様化・個性化」を目的とした選択制の拡大がいかなる課題を内包しているかに関する分析が行われてきた。たとえば、米国のハイスクールの事例に見られるような、系統性を欠いたいわゆる「安易な選択」に対する懸念は、選択制が拡大を始めた当初から指摘がなされてきた(3)。また、荒川（田中）は、高校の階層構造における上位校では大学進学に向けて生徒の学習内容を主要五教科中心に限定しているのに対して、大学進学を前提としない中位以下校ないし専門学科では生徒の興味、関心に応じた多様な教育が行われる傾向にあるとし、選択制の拡大が学校の進路形成機能における「二極分化」を引き起こしていることを明らかにしている(4)。さらに山村と荒牧らは、選択制の拡大がカリキュラムの多様化よりも「受験シフト」を強めることに寄与しつつあることから、教育課程政策の「意図」とその政策が履行された「結果」とのねじれを指摘している(5)。

これらの研究成果は、「多様化・個性化」の教育課程政策が、学校のもつ進路形成機能あるいは社会化機能にいかなるインパクトを与えるかという点について重要な問題提起となっている。しかし、こうした選択制カリキュラムの「意図せざる結果」がどのようなプロセスによって生起しているのかについては、十分に解明されているとは言い難い。この点を明らかにするためには、生徒のカリキュラムに対する主観的な意味付与を伴う「行為」のレベルにまで掘り下げて分析を加える必要がある。

そこで本稿では、これまで筆者が行ってきた総合学科でのフィールドワークの結果に基づいて、まず社会的行為の視点に立ったとき生徒の科目選択にどのような特質を見いだすことができるのかについて整理し、次にこの特質が何に起因するのかをカリキュラムの形態と生徒の選択行為との関連性の視点から検討する。この分析を通して、今後の選択制カリキュラムのあり方を考える上での基礎的な枠組みを提供したい。

なお、本稿でいうところの選択制カリキュラムとは、本稿の事例分析においてとりあげる総合学科をはじめ、単位制高校、総合選択制高校などに見ることができる、大幅な科目選択制を導入したカリキュラムのことを示している。

2　研究の課題と方法

(1) 生徒の「パースペクティブ」への着目

生徒の科目選択を個人的行為としてではなく社会的行為として捉える上でまず注目しなければならないのは、生徒が「選択するに値する科目」と「そうではない科目」とを区別する観点をどのような過程を経て構成するのか、またその観点がどのように変容していくのかという点である。なぜならば、生徒は教師によるガイダンスや仲間集団との情報交換など、他の学校成員との社会的なやりとりを通して、こうした観点を構成するものと考えるからである。この点を明らかにする上で有効となるのが「パースペクティブ」(perspectives) という概念である。ここでいうパースペクティブとは、ある選択の岐路に立った人々がその選択状況を切り抜けるために用いる、所与とされ常識的とされるものの見方、考え方、あるいは行為の様式のことを指す。人々は、自らのパースペクティブに従ってある対象を解釈し、それへの関わり方を決定し、またパースペクティブによってその対象への自らの選択行為を正当化する(6)。

ここで生徒のパースペクティブに着目する理由は、これに着目することで、生徒の科目選択に関するユニークな特質を見いだすことができるからである。その特質とは、すなわち、科目を選択する際の生徒の選択制カリキュラムの解釈が、生徒個々人の自由意思にのみ基づいて行われるのではなく、学校教育に特有の相互作用を通して集団として行われる、という特質である。たとえば、英国の教育社会学者ウッズ（Woods, P.）は、生徒がどのような理由から特定の選択科目を「好き」ないし「有益」と見なすかについて、「向ー学校」的基準と「反ー学校」的基準があると考えた。ここでいう「向ー学校」的基準とは、「将来の仕事に関係あるか」「得意な科目か」「授業の秩序が保たれているか」といった、学校文化に適合的な理由を意味する。それに対して「反ー学校」的基準とは、「授業中自由に振る舞えるか」「試験がないか」「友人がいるか」といった、どちらかといえば学校文化からの逸脱を志向したものである。そして、ウッズによれば、生徒はこれらの選択基準を特定の集団ごとに特有の「集団のパースペクティブ」（group perspectives）として獲得している。すなわち、中産階級出身で習熟度別クラス編成の上位クラスにいる生徒は「向ー学校」的なパースペクティブを、労働者階級出身で成績下位のクラスにいる生徒は「反ー学校」的なパースペクティブを共有しているというのである(7)。

パースペクティブとは、このようにある共通の選択状況に置かれた特定の生徒集団が共有しているものの見方、考え方であり、それが個々の生徒の選択制カリキュラムの解釈およびその後の科目選択のパターンに対して強制力を発揮するようになる。したがって、このパースペクティブに着目するならば、生徒の「選択するに値する科目」と「そうではない科目」とを区別し、選択するという行為は、生徒個々人の諸属性にのみ還元される個人的な行為ではなく、集団の強制力やその集団のあり方を規定する学校組織の形態等、生徒の置かれている具体的な状況と密接に関連した社会的行為として捉えることができるのである。

しかし、上記のウッズの研究も含めて、生徒のパースペクティブに注目した科目選択に関する先行研究は、科目選択をめぐる学校成員間の相互作用そのものに関心が集中しているため、カリキュラムの形態と生徒の構成するパースペクティブ、そして生徒の科目選択との間に見られる関連性について、十分明らかにはしてこなかった。加えて、これらの研究は、生徒の科目選択に様々な差異が生じる要因を、教師や親などによってもたらされる顕在的、潜在的な強制力に求めているため、選択を行う生徒自身の視点よりも、むしろ一定の選択を生徒に要求する教師や親の視点に分析の焦点を当てる傾向にあった。それだけに、科目選択の過程における生徒のパースペクティブと選択制カリキュラムの形態との関連性を、特定のカリキュラムの下での生徒のカリキュラム経験に即して解明することが必要となってくるのである。

(2) 研究の対象と方法

そこで次に、筆者が行ってきた事例研究の結果に基づいて、カリキュラムの形態と生徒のパースペクティブとの間にいかなる関連性を見いだすことができるか、例証を試みてみたい。筆者はこれまで二校の総合学科において長期にわたるフィールドワークに携わってきた(8)。調査対象校の概要は表１のとおりである。

周知の通り、総合学科は、豊富な選択科目を開講することによって生徒が自らの関心や将来の展望に応じて自由に科目を選択していくシステムをとっており、「多様化・個性化」を目的とした近年の高校教育改革の中心的な存在となっている。さらに総合学科では、大幅な科目選択制の導入に伴って、主に１年次に「産業社会と人間」というガイダンス科目を開設し、生徒に自らの進

路を意識させ、その進路に対応した科目選択をさせるための組織的な指導が行われている。こうした試みは、近年のキャリア教育に関する報告書においても注目を集めている。

筆者が総合学科における生徒の科目選択に関するフィールドワークを始めたそもそもの問題関心は、単発の質問紙調査では検討することが困難な生徒の科目選択の「過程」を明らかにしたいというものであった。すでに述べたように、「多様化・個性化」を目的とした選択制の拡大は「多様な生徒の関心」への対応を意図しており、基本的には生徒の“自主的な”選択に依存している。それゆえ生徒は、科目あるいはコースを選択する以前からそれらに対して何らかの関心をもっていることが期待され、また前提とされてきた。

こうした前提に対して、筆者は、生徒の選択がカリキュラムに示された限られた範囲の選択肢の中で行われる以上、生徒が何らかの関心に基づいて科目を選択するばかりでなく、逆に、科目を選択する過程でカリキュラムの内容に適合するように事後的に自らの関心を作り上げていく側面があるのではないかと考えた。そこで、生徒が科目を選択する過程でいかにしてカリキュラムの潜在的な意図に即した形で自らの関心を作り上げていくのか、あるいは作り上げていないのかについて、時系列的に明らかにしようと試みたのである。

表1　調査対象校の概要（1998年度）

学校名	S高校	H高校
総合学科の設立年	1994（平成6）年	1996（平成8）年
前身	1946（昭和21）年　創設 生物資源科　機械技術科 家庭科学科　国際産業科	1996（平成8）年　新設 普通高校と商業高校を統合再編
1学年の生徒数	160名　4クラス	240名　6クラス
必修科目数 原則必修科目数 総合選択科目数 自由選択科目数	25（35単位を履修） 3（6単位を履修） 85 28	30（48単位を履修） 3（6単位を履修） 87 138
系列名	Ⅰ類（農業系）：生物資源　エコロジー Ⅱ類（工業系）：機械技術　メカトロニクス Ⅲ類（家政系）：食物栄養　アパレル Ⅳ類（商業系）：国際流通　ビジネス	情報システム　国際ビジネス 語学コミュニケーション　芸術文化 自然科学　社会経済
学区	通学時間90分以内の地域	全県一区
推薦入学枠	入学者定員の65%前後	入学者定員の50%前後
科目選択の時期	1年次の9月はじめに、2，3年次で履修する科目を選択	1年次の12月初旬に、2，3年次で選択する科目を選択

注）「総合選択科目」とは系列の内容に即した専門科目、「自由選択科目」とはその他の科目を指す。

3　選択制カリキュラムの形態と生徒のパースペクティブとの関連性

(1) 選択制カリキュラムにおける「枠」の作用

総合学科での調査を進めていく上で筆者がとくに着目したのは、総合学科のカリキュラム上の特質の一つである「系列」の存在である。「系列」とは、総合学科において生徒が系統的な科目選択を行えるよう設置されている科目のカテゴリーのことで、他学科でいうところのコースに類似したものである。ただし、「コース」とは異なり、「系列」はあくまでも科目選択のための「目安」でしかなく、制度上、生徒の科目選択に対して何ら規定力をもたない。したがって、生徒は各「系列」の系統性を無視して科目を選択したとしても、何ら支障はないわけである。

筆者が「系列」に着目した理由は、これが生徒の科目選択の「目安」としての役割以上に、生徒がパースペクティブを構成する上での準拠枠としての役割を果たしている可能性があるからである。というのも、「系列」といったカリキュラムに明示された知識カテゴリーは高校卒業後の生徒の進路を先取りする形で設定されており、それゆえ生徒は、この知識カテゴリーを自らの人生を見通すための準拠枠として利用するものと考えられるからである。この点については、生徒による科目選択の自由度がきわめて高い米国の選択制カリキュラムとの比較することでわが国の選択制カリキュラムの特質を描き出した諸研究において、示唆的な指摘がなされている。

すなわち、わが国の選択制カリキュラムの特質としてまず第一にあげることができるのは、わが国の選択制カリキュラムが、常に生徒の選択行為および学習活動に対して一定の「枠」を設けることを志向している点である。飯田は、新制高校発足から10年あまりの間に起きた科目選択制の歴史的展開を検討していく中で、わが国の選択制カリキュラムがもつこの特質について言及している。戦後の新制高校発足当初、生徒個々人の関心あるいは個性に応じるために科目選択制が採用された。しかしその後10年あまりの間に、この科目選択制は、生徒の特定の進路に分化させていくためのコース選択制に変容していった。そのひとつの帰結点が、1956（昭和31）年に改訂された学習指導要領における科目選択制の事実上の放棄とコース制の導入である。飯田は、この変化が、わが国の高校教育の「構造」に規定された動きであると指摘している。即ち、わが国の高校教育カリキュラムには、生徒の選択に対して常に「一定の『枠』を設けようとする力が働いて」おり、このことがわが国の選択制カリキュラムの在り様を根本的に規定していると指摘している[(9)]。

このようなわが国の選択制カリキュラムの特質は、米国のハイスクールに見られる選択制カリキュラムの特質とは対照的である。米国の選択制カリキュラムにおいては、「カフェテリア方式のカリキュラム」と称せられるように、基本的には一切の「枠」が設けられていない。ローレン（Rohlen, T. P.）が述べているように、米国の選択制カリキュラムではあくまでも個人の才能や関心に基づく科目選択が重視されており、そうした「個人に選択の機会を提供する制度への執着」[(10)]こそが、アメリカ人特有の関心事となっている。それに対してわが国の選択制カリキュラムにおいては、一方で生徒個々人の関心に基づく科目選択が提唱されながら、同時にカリキュラム上の何らかの「枠」の存在が自明視され、その「枠」に準拠して科目を選択することこそが、系統性をもった“良い”選択とみなされている。ここに、「系統性の神話」とも言うべき、わが国の選択制カリキュラムの特質を見出すことができる。

わが国の選択制カリキュラムの第二の特質としてあげることができるのは、上記のカリキュラム上の「枠」が、単に一定の知識カテゴリーとしてのみ設定されているのではなく、生徒の進路を先取りし、進路選択の指針となるべく設定されている点である。即ち、わが国の選択制カリキュラムは、その教育を受けることによってどのような進路が開けてくるのかという観点から編成

され、あるいは評価されている。その際、カリキュラム上の「枠」は、カリキュラムの編成者側が想定した進路展望を生徒集団に明示し、その進路に向けて生徒集団の学習活動を専門分化させていく枠組みとしての役割を果たしているのである。

こうした選択制カリキュラムの特質は、これまでわが国の高校が社会に対する効率的な人材配分のエージェントとしての地位を保持してきたことを意味している。クラーク（Clark, B. R.）は、日米の高校の重要な差異として「日本では中等学校入学時に、さらに高等教育機関入学時点でも、生徒たちを明確な形で分化すること」[11]をあげている。これは、基本的に総合制の形態をとり、普通科と専門学科、学校内でのコースあるいは系列といった区別を設けていない米国のハイスクールとは対照的なわが国の高校教育独自の特質なのであるが、同時に高校が社会への人材配分に対して果たす機能についての日米間の違いをも示している。この点について、耳塚は、クラークに依拠しながら、日米の高校の違いを「上級学校との接続」（upward coupling）と「下級学校との接続」という形で明確に対比させている。すなわち、「アメリカのハイスクールが、理念・行政・教育内容・教員組織などの点で、初等学校と密接に結びついた構造を持っているのに対して、日本の高校教育は、それらの点で大学と深く結びついてきた。とりわけ日本の高校教育の教育課程の範囲と水準は、実質的には大学入試によって強くコントロールされている」[12]のである。こうした高校教育のもつ「上」との接続という特質は、何も高等教育との接続に限ったことではないだろう。というのも、専門学科のカリキュラムについても、それがいかに有益であるかは職業という「上」との関連によって正当化されるからである。普通科にしろ、専門学科にしろ、カリキュラム上の「枠」は何らかの形で社会の産業構造へと生徒を収斂させていくことによって正当化され、この図式は現在も、カリキュラムを編成する教師集団の認知の仕方を形作っている。このことが、進路と結びついたわが国の選択制カリキュラムの特質の一端を支えているのである。

ここで問題となるのは、総合学科の選択制カリキュラムにおける「系列」が上述の「枠」としての役割を果たしているかどうか、という点である。すでに述べたように、総合学科における系列は、生徒の科目選択に対する規定力を付与されていない。にもかかわらず生徒の科目選択に「枠」としての系列の規定力を見いだすことができるならば、生徒の選択行為は単なる個人的な行為ではなく、社会的な性質をもったものとして捉えることができるであろう。

そこで次に、社会的行為としての生徒の科目選択の特質を、とくに系列のあり様との関連において検討してみよう。

(2) 社会的行為としての生徒の科目選択の特質

まず、筆者が行った調査結果から、S高校およびH高校における生徒の科目選択の傾向性について見ていきたい。表2は、生徒が科目を選択する際にどのような科目を中心に選択したかを調べた結果である。これを見てみると、S、H両校とも、8割以上の生徒が系列関連の科目を中心に選択したと回答している。このことから、両校の生徒とも系列という枠に対してコミットし、これに準拠した科目選択を行っていることがわかる。

ただし、生徒がどの系列の科目を中心的に選択しているかによって、系列へのコミットの仕方には差異が見られる。表3は、系列関連の科目を多く選択したという生徒のなかに興味中心の科目選択を行った生徒と進路志向の科目選択を行った生徒が、それぞれどの程度いるのか調べ、系列別に比較した結果である。ここでは便宜上、系列の科目を多く選択しつつ同時に興味ある科目を多く選択している生徒を「系列＝興味型」の生徒、系列の科目を多く選択すると同時に進路に

必要な科目を多く選択している生徒を「系列＝進路型」の生徒と呼ぶことにしよう。これを見ると、教育内容において実技あるいは実習志向の強い系列の生徒が「系列」と「興味」とを関連づけて認識する傾向にあるのに対し、「自然科学系列」「社会科学系列」といった従来の普通科の理系および文系に相当する系列においては、生徒は「系列」と「進路」とを関連づけて認識する傾向にあることがわかる。このことは同時に、実技あるいは実習中心の教育内容をもつ系列が、相対的に生徒の進路展望指針となり難くなっていることを示している。とくにS高校のⅠ類（農業系）およびⅢ類（家政系）、H高校の芸術文化系列といった、現代の産業構造と照らし合わせて現実的な進路選択には収斂しにくい系列において、この傾向は強くなる。逆に、座学中心の教育内容をもつ進学志向の強い系列は、生徒の進路展望の構成を促進する一方で、生徒の興味に基づく科目選択をある程度犠牲にする結果となっている。

表2　S高校およびH高校における生徒の科目選択の傾向性（%）

	S高校（N＝285）	H高校（N＝373）
興味のある科目を中心に選択	90.2	74.9
系列の専門科目を中心に選択	84.9	81.0
就職に必要な科目を中心に選択	54.9	30.8
進学に必要な科目を中心に選択	48.4	73.9
中心やまとまりがない	23.6	26.3

注）「あてはまる」と「まああてはまる」に回答した者の合計

表3　系列別に見た「系列＝興味型」の生徒と「系列＝進路型」の生徒の割合（%）

	系列名	系列＝興味型		系列＝進路型
（S高校）	Ⅰ類（N＝70）	77.1	≫	47.8
	Ⅱ類（N＝61）	90.2		86.9
	Ⅲ類（N＝64）	93.8	≫	57.8
	Ⅳ類（N＝63）	79.4		76.2
（H高校）	情報システム（N＝29）	75.9		69.0
	国際ビジネス（N＝15）	46.7	＞	33.3
	語学コミュニケーション（N＝45）	64.4	＞	53.3
	芸術文化（N＝94）	84.0	≫	62.8
	自然科学（N＝92）	50.0	≪	74.7
	社会経済（N＝97）	50.5	≪	81.1

注）＜、＞は10～20%の差異を、≪、≫は20%以上の差異を示す。

ここで注意しなければならないのは、興味充足のためであれ、進路達成のためであれ、生徒の科目選択が多くの場合系列に準拠した選択になっていることである。換言すれば、生徒の選択行為は、系列というカリキュラム上の枠の正当性を維持し、これに規定力を与えるものとなっているのである。こうした選択行為の傾向性は、生徒の実際の科目選択のパターンにおいても見いだ

すことができる。筆者は、S高校での科目選択の場面を観察するなかで、生徒の科目選択がほぼ次のパターンに則って行われていることを見いだした。そのパターンとは、①特定の系列の専門科目をまず集中的に選択し、時間割を埋めていく、②それだけでは時間割がすべて埋まらないため、余った時間を普通科目、他の系列の科目等で埋めていく、というものである。このことは、各系列の専門科目を頂点として、その他の科目を従属的な地位に置くという科目間の成層構造が、生徒集団の間で共有されていることを表している。

以上の分析結果から、系列という総合学科の選択制カリキュラムにおける枠は、生徒の科目選択の過程において安定したパースペクティブ—それが即時的な興味充足を志向するものであれ、長期的な進路展望を志向するものであれ—を構成するための媒介物となっていると考えることができる。つまり、系列は、生徒集団に対して「何が学ぶに値する科目か」を区別するための基準を提供し、また自らの選択を正当なものとして他の学校成員に提示するための枠組みとなっているわけである。このように、系列というカリキュラム上の枠を媒介することによって、科目選択という生徒の個人的な行為は、一定のまとまりと傾向性をもった社会的な行為としての正当性を付与されるのである。

留意しなければならないのは、このことは結果として、個人の興味や進路展望といったパースペクティブに基づいて行われた選択行為が系列というカリキュラム上の枠の正当化に常に結びついていることを示しているという点である。すなわち、生徒にとっては何らかの見通しをもった価値ある選択行為も、生徒の視点を一歩離れれば、それは系列という既存の枠に自らすすんで取り込まれていく過程として捉えることができるのである。総合学科に限らず、選択制カリキュラムは、生徒がカリキュラムを作るという実施形態の新しさから様々な期待と批判を集めてきた。しかし一方で、その教育内容については本格的な再考がなされないまま、系列あるいはコースといった形で旧来の枠を維持している。これは、選択制カリキュラムを導入した各高校が、生徒の学習内容への統制を緩和することで生徒の興味の充実を図ると同時に、進路保障という観点から旧来の枠に基づいた系列による統制の維持をも図らなければならないことによる。しかし、この枠は必ずしも生徒の進路展望を促進する方向には機能しておらず、表3で見たようにむしろ生徒集団の「興味の充実」と「進路の実現」を分断する方向に作用しがちなのである。ここに、選択制カリキュラムの「興味」と「関心」をめぐるパラドクスを見いだすことができよう。すなわち、生徒の進路を保証するべく設定され、維持されている旧来の枠において、生徒は「興味の充実」か「進路の実現」かという二者択一の形でしかカリキュラムを意味づけることができない状況に置かれることになるのである。

このように考えると、ここでいま一度検討する必要があるのは、旧来のカリキュラム上の枠が、果たして生徒の進路展望の構成を促進する上で妥当なものなのかどうか、という点ではないだろうか。近年、キャリア教育に対する関心の高まりを背景として、大幅な科目選択制と連動した普通教育と専門教育の統合、継続的なキャリアガイダンスの実施といった試みに注目が集まっている(13)。こうした試みを効果的なものにするためには、以上に述べてきたような教育内容の枠組みそのものを問い直す視点が不可欠となるだろう。

4　まとめ

以上、本稿では、高校生の科目選択を一つの社会的行為として捉え直すことで、生徒の選択行

為にどのような特質を見いだすことができるか、またその規定要因はいかなるものなのかについて検討してきた。これまで述べてきたように、選択制カリキュラムには、「選択」という生徒集団の自発的な行為を承認するシステムを通して生徒集団の関心および将来展望を一定の範囲に方向づけようとする、一見逆説的とも感じられる過程が存在する。そして、この過程を媒介する仕組みとなっているのが、系列やコースといった選択制カリキュラムに内蔵された「枠」なのである。

誤解のないように述べておくと、筆者は、生徒が常に枠に準拠した選択行為を強制されていると見ているわけでも、また、枠の存在そのものに否定的なわけでもない。というのも、枠は生徒が自らの関心や進路展望を形成する上での基準として作用しうるし、そもそも科目選択という行為自体が枠に対する反応として生起する社会的行為と考えるからである。問題なのは、科目選択が生徒の個人的な行為あるいは「自己責任」とされることで、枠のあり方を含めたカリキュラムの形態と、生徒の選択行為との関連性が看過されてしまうことである。

生徒の選択行為を社会的行為として捉え直すことは、生徒はカリキュラムの内容に応じて関心や進路展望を作り上げていく側面、すなわちカリキュラムの組織的社会化の側面を解明し、選択制カリキュラムの教育内容のあり方そのものを問い直していく上で、不可欠な視点となるものと考える。

【注】

(1)文部省（1997）「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（中央教育審議会第二次答申）」

(2)M・ウェーバー（1922/1972）清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波文庫、8頁

(3)橋爪貞雄（1992）『二〇〇〇年のアメリカ－教育戦略　その背景と批判』黎明書房

(4)荒川（田中）葉（2001）「高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容－新たな選抜・配分メカニズムの誕生－」『教育社会学研究』第68集、167－185頁

(5)山村滋、荒牧草平（2003）「大学入学者の高校での科目履修と受験行動－普通科に関する実証的研究－」『カリキュラム研究』第12号、1－14頁；大学入試センター研究開発部（2004）『高等学校における新しい教育課程の編成』

(6)Becker, H. S., et al.（1961）*Boys in White: Student Culture in Medical School*, The University of Chicago Press

(7)Woods, P.（1979）*The Divided School*, Routledge and Kegan Paul, pp.31-38

(8)岡部善平（2005）『高校生の選択制カリキュラムへの適応過程－「総合学科」のエスノグラフィー－』風間書房

(9)飯田浩之（1996）「高校教育における『選択の理念』－科目選択制の歴史的展開と今日の高校教育改革－」『筑波大学教育学系論集』第20巻第2号、43－57頁

(10)トーマス・P・ローレン（1983/1988）友田泰正訳『日本の高校　成功と代償』サイマル出版

(11)バートン・R・クラーク（1985/1986）耳塚寛明抄訳「高校と大学　どこがアメリカで狂っているのか〈その3〉」『ＩＤＥ　現代の高等教育』№272, 64－71頁、66頁

(12)耳塚寛明（1996）「高校教育改革と教育構造」耳塚寛明、樋田大二郎編著『多様化と個性化の潮流をさぐる高校教育改革の比較教育社会学』学事出版、88－102頁、96頁

(13)国民教育文化総合研究所（2004）「若年層の雇用問題と職業教育のあり方を考える」

【付記】

本稿は、拙稿（1998）「『総合学科』高校生の選択制カリキュラムへの適応行動に関する研究－生徒の『系列へのコミットメント』を中心に－」『筑波大学教育学系論集』第23巻第1号、29－44頁、および、拙著（2005）『高校生の選択制カリキュラムへの適応過程－「総合学科」のエスノグラフィー－』風間書房　の一部を再構成したものである。